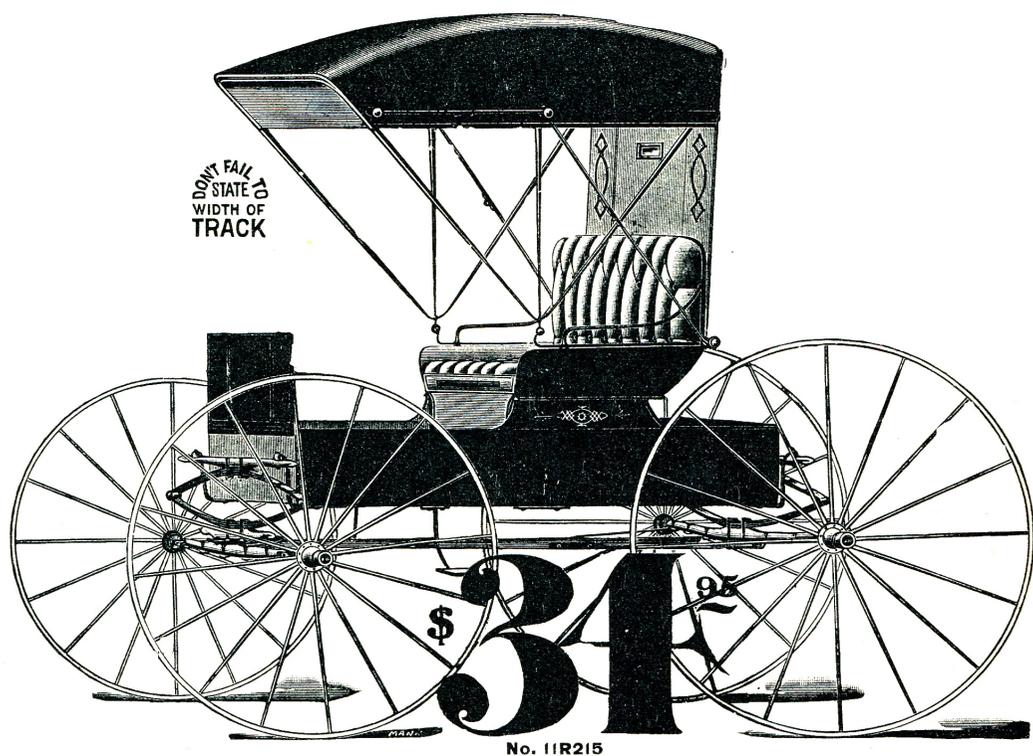


ジミー・コリガンの余白に



細馬 宏通

【長いまえがき - 『ジミー・コリガン』と紙もの集め -】

クリス・ウェアのジミー・コリガンを読むことは、紙もの集めに似ている。

きれいに束ねられ、書物の形をしたものではない紙もの。絵はがき、手紙、写真、新聞・雑誌の切り抜き、引札、ビラ、色あせた錦絵や石版画、立版古におもちゃ絵に双六、ペーパークラフト、トレーディング・カード。書物の形にまとめられぬもの、あるいは書物から剥がれ落ち、切り取られたもの。

最初はただ、そこに何の意味があるのかは分からず、ただ、古い紙の発するノスタルジーに惹かれて集めていくに過ぎない。しかし、その中の、ある人物、ある建物が気になり始めると、あちこちに積まれた紙の中に、つながりが見つかり始める。その歴史を追って、あちこちの図書館の所蔵リストを調べ、骨董市や古書店で一枚いくらの紙束の中から目指す絵、目指すことばを拾い集めるうちに、資料はうずたかくなり、符丁はあちこちに現われる。

しかし、いつも連関のあるものばかりが手に入るわけではない。見出しに惹かれて読み始めた長い文章が、じつはまったく役に立たないものであったことに気づく。いっけん美しく見えた写真や絵はがきが、まったくの駄物であったことがわかる。

それでもなお、無駄に集まった紙束の古びた紙の質感からは、過去の記憶がこちらも意識せぬうちにゆるやかに溶け出してくるようで、手に取るものを静かに誘い続ける・・・

このような紙もの集めの感触は、ジミー・コリガンを読むときの感触とまさにぴったり重なるのである。

じっさい、ジミー・コリガンという書物をたどることは、「読む」というよりは、「集める」という体験に近い。

たとえば、ハード・カバー版を手にとったとたん、そのカバーは通常の本ではあり得ない形で折り畳まれており、そこにはさまざまなコラムで隣り合わされ、矢印でつながれた夥しいイラストが配されてい

るらしいことに気づく。書物のデザインに興味がある人なら、間違いなくこのカバーを剥ぎ取ってみるだろう。

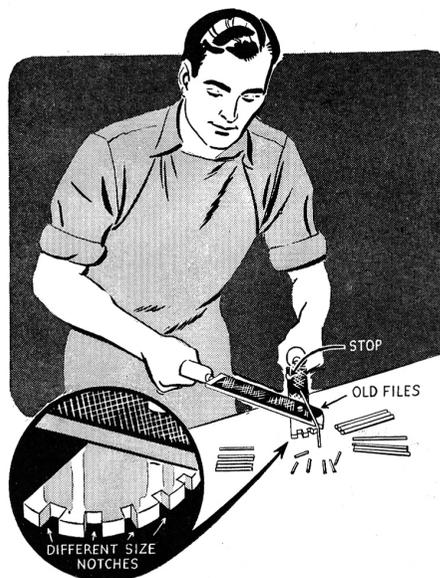
すると、そこにはジミー・コリガン家とコリガン自身に関する夥しい情報が充ち満ちていることに気づく。ジミー・コリガン自身が出したと見られる交際相手募集の文章。看護婦の手によると思われる記録。買い物リスト。ジミー・コリガン・ペーパークラフト。そして、ジミー・コリガンと家族との連関を表わしていると思しきピクトグラム。この夥しさ、行きすぎた密度は、読者を誘っているというよりは、むしろ敬遠しているかのようだ。

さらに、そのカバーを何気なく裏返すと、そこにはさらに複雑な双六まがいのピクトグラムが綿々と描かれている。じつはこれは、18世紀に始まるコリガン家の長い系譜を表わしており、子細に検討するならば、本編には記されていない彼の曾曾祖父の物語までそこからは読みとることができる。

しかし、これらのさまざまな工夫は、小説のように一次元の文字列に配置されているのではない。逆に、それはあちこちに散逸しながらあちこちで接続し、うずたかく積み上げられた紙ものの資料のように、見る者を幻惑する。

少なくとも、初めてこの書物に接する者にとっては、この過剰な情報量は、読みこむのをあきらめさせるに十分である。

見返しには、だめ押しするかのように、びっしりと細かい字体で記された「主な使用法」他が記されている。それらはまるで読むのが無駄であることをわざわざ読者に告げるかのように、いかにもくくだしい情報で埋め尽くされており、ほとんどの読者は、そこに籠められたあまりの冗長さと、とりつくしまのなさにあきれ果て、ざっと一瞥しただけで、まずは本編へと進もうとするだろう。



その本編も、必ずしもわかりやすい構成にはなっていない。

物語は、主として、祖父ジェームズの時代とジミーの時代の二つを往復しながら語られるのだが、そこにはジェームズやジミー自身の夢も混入しており、夢のはじまりとともに、物語は、あたかも暗闇を走る幻燈器の一筋の光のように、あるいは風に揺れる赤い一筋の髪のように、時間という一次元の流れから逃れて、固有の時間をたどり始める。

百年で隔てられた二つの時代のあいだにはさまざまな符丁が存在し、壁に掛けられ、筆筒にしまわれた写真、街の標識、風景の中にあるささいな手がかりが、あたかも本編にしばしば登場する赤い鳥やスーパーマンの記号のように、時代を行き来するためのワープ・ゾーンを形成している。さらに、物語に登場する同時代の人物や事物の間にもさまざまな符丁が存在する。

そして、これらの符丁は、最初からあからさまに符丁ですよという格好で現われるのではない。むしろ最初はただの風景として通り過ぎる。読者は、あたかも後ろから鈍器で殴られるように、あとからその符丁に気



づかせられる。いちど通り過ぎておいて、あとから読者の意識にのぼらせるというこうした手つきは、どこかナボコフを思わせるところがある。

そして、符丁感覚こそが、まさしく紙もの的なのである。

何の役に立つのか分からずにとっておいた一枚の紙が、ある日突然、さまざまな符丁によって満たされていく奇妙な感覚。そのような紙もの感覚が、この書物にはいたるところに仕掛けられており、その符丁に気づけば気づくほど、読者はその複雑な物語の連関の中に絡め取られていく。そして、いつしかジミー・コリガンの、情けなくも逃れがたい「存在の耐えられない連鎖」へと巻き込まれていくことになる。

ところで、わたしの周囲には、このジミー・コリガンの世界に魅せられた人は少なくないのだが、じつのところ、この物語を読み切った人は、どうやらさほど多くないようだ。

もちろん、まだ日本語訳がない(2005年8月現在)ことがその一因ではあるだろう(注:現在は三巻本が出版されている)。

けれども、たとえ英語を読み取ることができたとしても、アメリカの歴史や視覚文化とはあまり縁のない日本の読者にとって、この本を読み込み、さまざまなリンクに気づくことは必ずしも易しいことではない。じっさいのところ、この本に出てくる「シカゴ万博」なるものがまったくのフィクションだと思っている人も中にはいるだろう。

「ジミー・コリガン」を読みながら、シカゴ万博の時代背景や、その実態について調べていくと、この物語の奥行きはさらに深くなる。

たとえば、シカゴ博の開かれた1893年が、南北戦争の「戦後」の時代であることは、この物語にとって重要な要素だ。アイリッシュ系のウィリアム・コリガンは、南北戦争の北側の前線で九死に一生を得た男であり、そのいっぽうで、戦争を戦わなかった(そもそも戦いに参加させてもらえなかった)黒人に対してねじれた感情を持っている。このことは、彼のささいな言動や息子に対するウィリアムの抑圧的な態度を理解するための基本的背景となっている。

また、この本の舞台となるシカゴ万博会場の規模を知ってから登場人物の足取りをたどるならば、ジェームズ・コリガンの「とほうもない大きさだった」という回想が誇張ではなく体感できるだろう。



さらに言えば、19世紀末のこの万博は、さまざまな視聴覚文化と関係しており、それはひいては、「ジミー・コリガン」の作中に現われるさまざまな視覚装置(ゾートロープ、絵はがきなど)と関わっているのだが、そうした連関を知っていると、この本を読む楽しみもさらに増す。

じつのところ、わたしはさほどアメリカ史に通じているわけではなく、読み直すたびに見逃していたリンクに気づいては「そうだったのか！」の連続なのだが、幸いこの物語の舞台のひとつであるシカゴ博については、紙もの集めをする途上で調べたことがあり、手元にいくつか資料もある。そうした資料を見るにつけ、クリス・ウェアがいかに周到に歴史的資料を読み込みながら、しかもそれを単なる過去のできごとではなく、現実の、人と人との感情を動かしあう場として構成しているかを痛感している。



そこで、以下では、『ジミー・コリガン』の端々に偏在する手がかりから読み取ることができたものを、手元の紙資料とつなげながら、いくつか断章めいたものを加えておこうと思う。

説明はあくまで断片的であり、しかも、あちこちで「ジミー・コリガン」本編から逸脱している。にもかかわらずあえてそうした形式をとるのは、そのほうが、「ジミー・コリガン」の紙もの的魅力を語るにはむしろ相応しいと考えるからである。

2005年8月
細馬 宏通

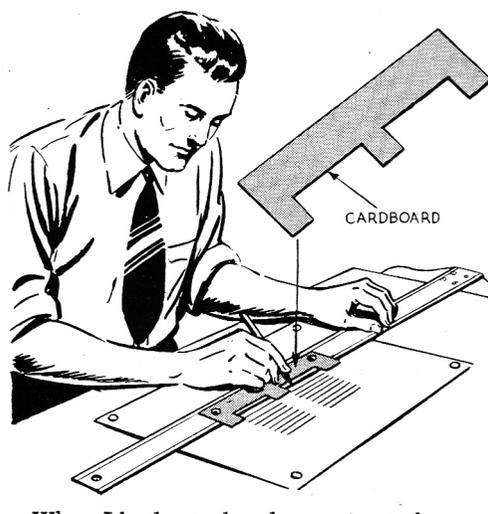


【コリガン一家の家族史】

「ジミー・コリガン」の作中、養女のエイミーが、家族史のレポート宿題を書くために祖父ジェームズ・コリガンからの聞きとりをする場面がある。エイミーの書いたレポートが結局どのようなものだったのかは、作中では触れられていない。しかし、その内容は全く闇の中というわけでもない。

なぜなら、この本のあちこちに埋め込まれたピクトグラムには、コリガン家が移民としてアメリカにやってきてからのことが、かなり詳細に描かれているからだ（とくに、英語版の表紙カバーには、コリガン家の系譜についてのヒントが多数隠れている）。

ここでは、作品には現れないエイミーのレポートの内容を作り上げる形で、エイミーの視点から、コリガン家の家族史を再構成してみよう。



おじいさんに聞いた話（家族の歴史レポート）

エイミー・コリガン

一九世紀のはじめ、おじいさんのそのまたおじいさん J. コリガンはアイルランドからホワイト・スター・ラインに乗ってニューヨークにやってきました。長い苦勞の末、おじいさんのおじいさんはニューヨークでお医者さんになりました。

1863年、南北戦争がおきて、おじいさんのおじいさんの息子ウィリアム・コリガンは、徴兵に応募しました。けれども、ウィリアムを残して部隊は全滅してしまい、ウィリアムは右手の中指を吹き飛ばしてしまいました。ようやく兵役を終えてニューヨークに帰ってきたウィリアムを待っていたのは、おとうさんが死んだという知らせと、嘆き悲しむおかあさんでした。

そののち、工夫として働いていたウィリアムは、新聞の募集広告を見つけました。そこでは、大火(1871年)によって焼失したシカゴの復興のためにアイリッシュの働き手を募集していました。そのころ、シカゴには、新しいビルディングや家を建てるためにたくさんの労働者がやってきて、人口はどんどん増え、アメリカを代表する都市へと発展していました。

ウィリアムもそうした労働者の一人でした。シカゴに渡ったウィリアムは建築ガラス業を営むようになり、一頭立ての馬車を乗り回してあちこちに仕事にでかけるようになりました。やがて、ウィリアムは結婚して、シカゴ郊外に小さな二階建ての二世帯住居を建てました。二階には、まだ夫の死から立ち直ることができないで泣き暮らしているおかあさんを二階に住まわせて、自分たち夫婦は一階に住むようになりました。けれども、奥さんは出産の際にジェームズ・コリガン（エイミーのおじいさん）を残して死んでしまいました。生後すぐに母親と死に別れてしまったジェームズにとって、彼女の記憶は一枚の写真だけだったそうです。

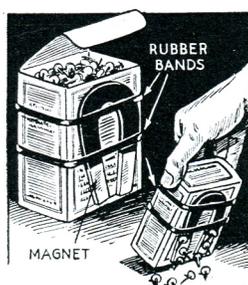
ウィリアムとジェームズ父子はシカゴで二人暮らしを始めました。けれども、ウィリアムの仕事は次第に行き詰まってきました。ジェームズが11才のとき、おばあさんが死にました。ちょうどシカゴ万博の開催が決まった頃で、ウィリアムは万博準備の仕事をもらい、会場近くの労働者宿舎に移り住むことになりました。

シカゴ博の初日、ジェームズはウィリアムに連れられてシカゴ博に行き

ました。それはとても大きな、信じられないほど大きな博覧会でした。ジェイムズは、ウィリアムの働いていたパヴィリオンに行ったあと、工芸・リベラルアーツ館の屋上で、シカゴの街を眺めました。けれども、ウィリアムは、ジェイムズをそこに置き去りにしたまま行方をくらましてしまいました。

その後、孤児院に入れられた祖父ジェイムズは、やがて、パナマ動乱に従軍しました。結婚して私の父、ウィリアムが生まれましたが、奥さんはその後、自動車事故で亡くなってしまいました。

私の父ウィリアムは第二次大戦に従軍したのち結婚しました。今日初めて知ったことですが、父と前の奥さんとのあいだには子どもがいるそうです。前にいちど、父の右腕のいれずみに「ジミー」と書いているのを見たことがあります。たぶん、ジミーというのは、その子どもの名前なんだと思います。ということは、わたしには、ジミーという名前のお兄さんがいるということになります・・・



【シカゴの大火】

ジミー・コリガンの曾祖父ウィリアム・コリガンは、幻燈を映しながら、スライドについてきた解説文を単調に読み上げる。

「人々は押し合いながら川の方角へと進みました。盗賊たちは欲するままに物を盗み出しました。親に見捨てられた子供たちは悲しい最期をとげました。酔った男は動転して、娘の体からめらめら燃え立つ火にウィスキーをかけるありさまでした。」

シカゴが博覧会都市となったそもそものきっかけは1871年の大火だった。

10月8日日曜の夜9時頃、ランタンを転がした一頭の牛から始まったと伝えられる大火事は、折からの大風に勢いを得て、翌朝にはシカゴ中心部のほとんどを焼き尽くす未曾有の大災害となった。水道は壊れ、消防士はなすすべもなく、火災は火曜日まで続いた。

建築家のフレデリック・オルムステッド（彼はのちにセントラル・パークを設計し、シカゴ博のジャクソン・パークの造園設計をまかさね、コリガン親子はそこを歩くことになる）は視察に訪れた印象をこう書き残している。「街の大半は焼き尽くされてしまった。知らない人が地図で見てもこのありさまを創造するのは難しいだろう」「非常に分別のある人々でさえ、このありさまに感じ入って確かな口調でこう言う、これはこの世の終わりだと」しかし、シカゴはローマやバビロンやトロイのような運命はたどらなかった。

大火のあった当時、シカゴ周辺のさまざまなインフラは急ピッチで整えられつつあり、シカゴはこれから大都市として発展していこうというところだった。イリノイ・ミシガン運河（1848）、ガレナ鉄道（1850）、イリノイ中央鉄道（1851）、ミシガン南、ミシガンセントラル鉄道が次々と設立され、鉄道を延ばしつつあった。これらのインフラの多くが、大火のあとも機能したことで、シカゴは商工業の中心として復活することができた。

関東大震災が東京の地図を塗り替えたように、大火のあと、シカゴでは開発ラッシュが始まった。新聞には労働者を求める広告が載り、

船で、鉄路で、あちこちから人々が集まり人口はふくれあがった。R. ミラーは「ピューリタンたちが度重なる航海の果てに見つけたものを、シカゴ市民たちも見つけたのだ。ピューリタンにおける「タブラ・ラサ（白紙）」の感覚が、灰燼と帰したシカゴの上に投影されたのだった」と書いている。



GET INTO WELDING

Get out of that Blind Alley

EXPERT WELDERS MAKE GOOD PAY WITH A REAL FUTURE

The fellow in the picture above is really in a "spot"—he's in the "blind alley" every UN-TRAINED MAN gets into sooner or later. Same job, same pay—no future. Don't let yourself get into a rut. Start **right now** to

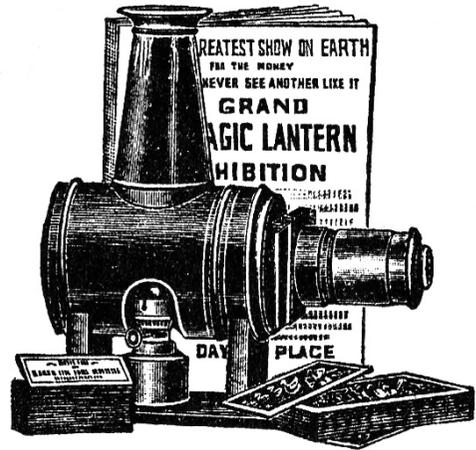
TRAIN for a real job . . . a permanent, good paying position as an expert welder. What we have done for others we can do for **you.** Trained men in Electric Arc and Oxy-Acetylene Welding **make good money.** There's a big, constant demand for expert welders in practically every industrial field. Aviation, Railroad, Automotive, Building Construction, Diesel and others. Men, 18 to 50, can **TRAIN** in spare time at home. You don't have to give up your present job. Actual practical shop experience. **FREE** placement service. Our institution founded 1927. Write for full information **FREE** without obligation.

UTILITIES ENGINEERING INSTITUTE
16 Utilities Bldg., 1314 Belden Ave., Chicago, Ill.

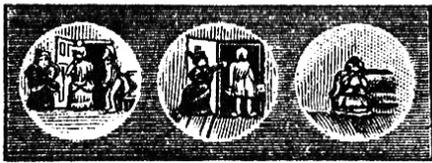
南北戦争で中指を吹き飛ばした後、ニューヨークでくすぶっていたウィリアム・コリガンもまた、アイリッシュ魂を見せつけるべく、大火後の建設業ブームに沸くシカゴに向かった。Builders Glaziers（建設・ガラス）業は、時流に乗ったものだった。おそらく彼はシカゴの大火を見たことはなかっただろう。が、それは、彼の人生を決定づけるできごとだったのである。

【幻燈】

幻燈器は、映画が誕生するまでは代表的な視覚装置だった。19世紀、アメリカでは各地で幻燈会が催され、異国の珍しい風物を写した写真を見せる興行師たちが活躍するいっぽう、家庭用の小さな幻燈器やスライドも売り出されていた。光源はオイルランプで、天井には煙を逃がす排気口がついていた。



The Brilliant Slides.



スライド（種板）は別売で、アメリカの歴史、世界の風景など、さまざまなテーマのものがセットで販売されることが多かった。こうしたセットもののスライドには、初心者が上映に合わせて読み上げることができるよう、それぞれのスライドに対する解説がついてきた。ウィリアムが読み上げているのも、こうした解説文だろう。



幻燈器メーカーとして有名だったエルンスト&プラנק社の家庭用幻燈器の箱に描かれている絵。
当時、家庭でいかに幻燈が使われていたかが伺える。

【シカゴ万博絵はがき】

アメリカ最初の絵はがきは、ジェイムズ・コリガンの物語の舞台となる 1893 年に発売された。郵政局は、万博を広く宣伝するべく、この年はじめて官製絵はがきを認め、美しい色刷りの博覧会記念絵はがきを発行したのである。絵はがきを作成したのは、シカゴの印刷業者、チャールズ・W・ゴールドスミスで、印刷を行なったのはニューヨークのアメリカン・リトグラフィック社に印刷を依頼だった。「リトグラフィック」ということばが表わすように、この時代、多色刷りの絵はがきは石版で印刷されるのが一般的だった。



1893年9月28日に Newbury に向けて差し立てられたある息子宛てのシカゴ万博記念絵はがき。描かれているのは戦艦イリノイの模型で、アメリカ海軍は威信を示すために、万博会場そばの湖畔にこの模型を浮かべた。湖が浅すぎて本物は入港することができなかったのである。

当時は、宛先面に通信文を書くことは禁じられていたため、絵はがきの絵の面には、通信を書くための余白が設けられている。には、次のように記されている。

「これはおまえが万博の記念に欲しがってたシカゴ万博の公式絵はがきだよ。こちらは元気でやっています。パパとママより。」

【コロンブスと万博】

大火のあとのシカゴは建築ブームによって生まれ変わり、その復興とコロンブスの大陸「発見」400年を記念して、1893年、大規模な万国博覧会が行われることになった。このため、シカゴ博は別名「コロンブス世界博」と呼ばれる。

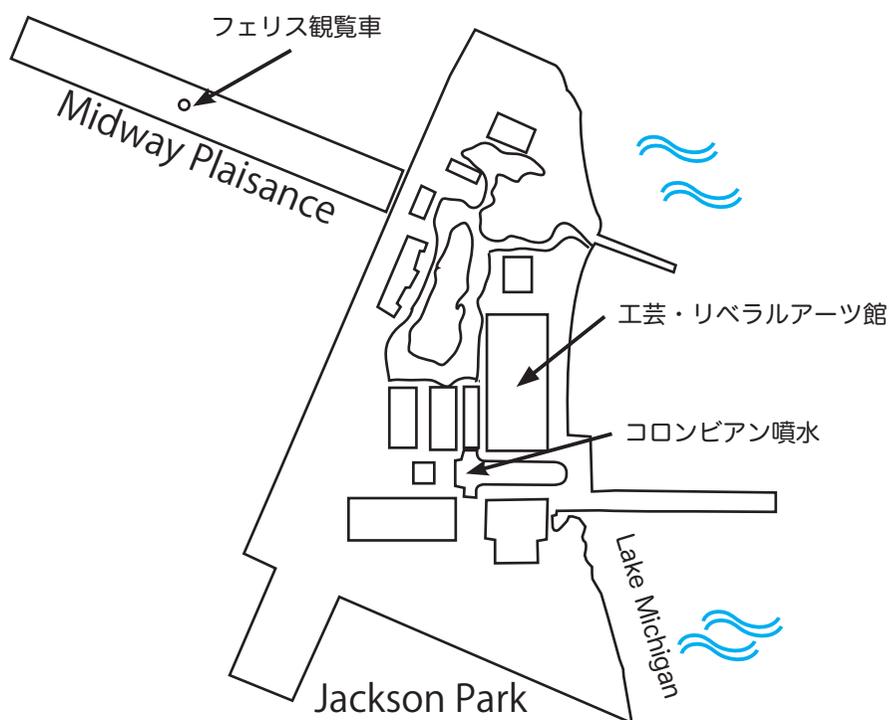
コロンブスがいかに偉大だったかは教科書の128ページから145ページに載っていて、その予習を忘れたジミー・コリガンの祖父ジェイムズ・リード・コリガンは、次の授業で出題された小テストをしくじることになる。



1893年10月9日、博覧会の「シカゴ・デイ」に来場した人々。この日の来場者数は75万人を越えた。これはエッフェル塔で人気を博した前回のパリ博の再考来場者数39万7千人を大きく上回る数字だった。

【コリガン親子の博覧会】

幼いジェイムズ・コリガンを圧倒する建築物たちは、じつは異様なまでの突貫工事によって作られた。会期の二年前、1891年の段階で、まだ建築家が設計図を集めている段階だった。しかも当初の計画の中心人物の一人だったジョン・ルートがこの年に急死した。遅々として進まない建設の手間を少しでも省略するため、主任設計者のダニエル・バーナムは石とスチールとレンガのかわりに漆喰とジュートをまぜあわせた「スタッフ」で、建物を覆うことにした。この結果、場内の建物の外壁は白で統一されることになり、会場は「ホワイト・シティ」と呼ばれた。



万博会場は白亜の巨大建築の居並ぶ湖岸側の「ジャクソン・パーク」と、フェリス観覧車を中心に各国の村や見世物小屋が雑多に通りに並び、に並ぶ「ミッドウェイ・プレザンス」の二つの会場からなっていた。

コリガン親子のたどる博覧会は、ジミーの願望と回想が入り交じり、現実には起こりそうもないルートをたどる。親子は、まず、ジャクソンパークにあるメイン会場へと向かい、巨大な池を見る。





池の前面には、環状の噴水に囲まれた真ん中にフレデリック・マクモニーによる彫刻が建っている。右には農業館、左には工芸・リベラルアーツ館が建ち、巨大な白いファサードで池を囲っている。

ジェームズのことばからすると、親子は、このあと、農業館か電気館、あるいは工芸・リベラルアーツ館あたりを見たいらしい。

ここから場面は、ミッドウェイ・プレザンスの雑踏の中へと移る。ミッド

ウェイは、真ん中に目抜き通りがあり、そこから各パヴィリオンの間へと入っていくと、もう少し親密な裏通りがあって、各国の出し物や見世物小屋が並んでいる。まだ未完成のフェリス観覧車のそばには、ゾープラクソグラフィカル・ホールがあり、そこで二人は、マイブリッジによる動く馬の映像に関する講演を聴く。

このあと、再び二人は、ジャクソン・パーク側に戻る。広大なミッドウェイとジャクソンパークを何度も行き来すれば、子供にとってくたびれはてる距離だ。このルートにはどうやら、夢や願望の力があずかっている。

力は、力の及ばぬ時点を確認めずにはいられない。二人は再び、巨大なリベラルアーツ館の屋上に上る…



北東側から見たリベラルアーツ館。左に見えるのは、日本館の鳳凰殿。



フェリス観覧車から見た万博会場。真下から向こう側に「ミッドウェイ・プレザンス」が延び、さらに高架を越えた向こうに、「ジャクソン・パーク」エリアが見える。手前、左手にあるのは、エドワード・マイブリッジが動く馬の写真を公開していた「ゾープラクソグラフィカル・ホール」。ウィリアム・コリガンはこの建物の建設現場で働いていた。

【人体標本】

ジェームズの父ウィリアムは、母親が死んだ日にジェームズと食事をとりながら、自分の死体を売る貧しい黒人少年の話をする。およそ食事時に、しかも母親の死んだ日にする話ではないが、当時、シカゴでは実際に死体の需要があった。アメリカの医学校では人体を使った実習が盛んに行なわれていたが、その際に用いるための人体標本や骨格標本が不足していた。死体は医学生にとって生きた百科事典であり、各医学校に死体を納入する墓荒らし業があちこちで行なわれていた。

このシカゴで1983年、人体売買を利用した身の毛もよだつ犯罪が起こった。それはH.H. ホームズによる連続殺人事件である。彼はシカゴ博に訪れた女性を次々と自分の経営するホテルで殺害し、その死体を骨格標本にした後、闇ルートを使って医学校に売り続けた。この驚くべき犯罪の詳細は、『ホワイティの悪魔』（別項参照）で読むことができる。



シカゴ博 工芸・リベラルアーツ館内部。

【フェリス観覧車】

前回のパリ万博で華々しく登場したエッフェル塔をしのぐランドマークは何にすべきか、委員会の選定は難航した。橋梁建築家のフェリスが提案した鉄製の巨大な観覧車が採用されたのは、1892年11月、準備期間はほんのわずかだった。結局、開会式の5月1日になっても観覧車はまだ円の半分ほどしか出来ておらず、木製の足場に囲われた状態だった。「ジミー・コリガン」でも、この観覧車の完成した姿は現われない。



フェリス観覧車を東側から眺めたところ。前面に広がっているのがミッドウェイ・プレザンスで、左は中国村、右は古き良きウィーン村。

に移築されたが、やがて飽きられて、1904年のレイジアナ万博で再築されたあとスクラップとなった。

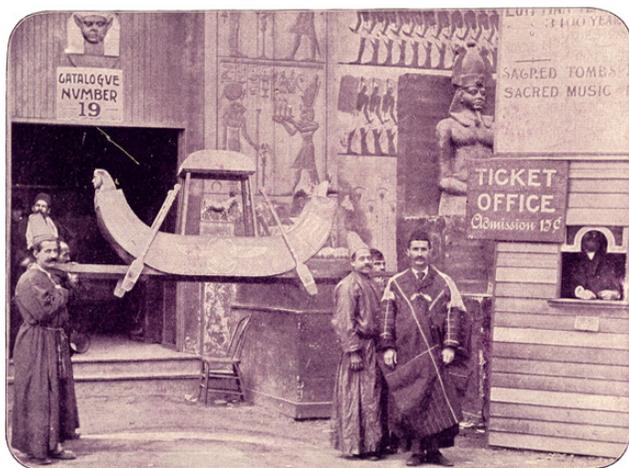
フェリス観覧車がようやく動き始めたのは、会期も半ばを過ぎた7月だったが、登場するや観客の人気を集め、莫大な収益を上げた。1900年のパリ万博にはこの観覧車を模したものが採用され、ウィーンにも同じような観覧車が現われた。

観覧車は博覧会の終了後、1894年まで会場で稼働し、シカゴ市内

【ジグフェルト、サンドウ】

シカゴ博当時のミッドウェイ・プレザンスの雰囲気をいまに伝える映画に「巨星ジグフェルト」がある。のちに「ジグフェルト・フォーリーズ」で名を成す彼が、駆け出しの頃、このミッドウェイ・プレザンスで見世物小屋をプロデュースしていたという設定である。見世物になっていたのは、アメリカ初のボディ・ビルダーにして、のちにエジソン映画にも登場することになるサンドウ。場所は、フェリス観覧車そばのインディアン・バザールらしきところに設定されている。映画では、ミッドウェイの裏通りの雑踏で、客を引き合うジグフェルトとライバルの姿が映し出されている。

ジグフェルトとサンドウがシカゴ博で興行をしたのは史実で、サンドウの伝記によれば、彼が舞台にあがったのは、会期の後半、8月1日夜のことで、ミッドウェイ・プレザンスにあったトロカデロ劇場は大入りの満員だったという。プロデューサーのジグフェルトはショーのあと、「\$300を支払う勇気のあるご婦人がいらっしゃれば、このあとサンドウのプライベート・ルームにて彼の筋肉の魅力をたっぷりとお感じいただけます」とアナウンスした。すぐさま二人の婦人が手を挙げて、舞台裏へと招かれた。この、おそらくはジグフェルトの演出によるできごとはすぐに新聞記事になり、サンドウの人気をいっそう高らしめた。



ミッドウェイ・プレザンスの裏通りにあったエジプシャン・シアター。おそらくは「巨星ジグフェルト」冒頭場面のモデルであろう。コリガン親子の歩いたミッドウェイの裏通りは、各国のパヴィリオンで働く人々が行き交い、エキゾチックな雰囲気を漂わせていた。

【鳳凰殿とフランク・ロイド・ライト】

シカゴ博には、「鳳凰殿」と呼ばれる日本館も建てられていた。日本から宮大工が派遣され、宇治の平等院をモデルにしたとされるその建築は、巨大な垂直の柱を主体とした他の建築とは対照的に、優雅な水平方向に向かう屋根の稜線や、人を招き入れる縁の存在によって、際だった存在だった。ただし、北側の池中央に浮かんだ中之島というロケーションは、木々に囲まれているせいもあって必ずしも人目を引く場所ではなかった。

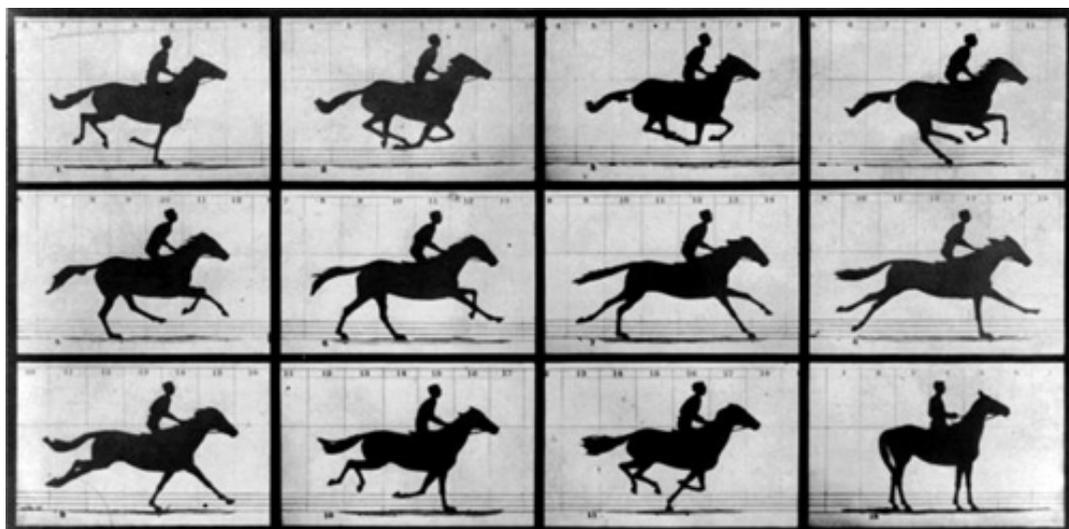
当時、この建築になにがしかの印象を得たであろう若き建築家フランク・ロイド・ライトは、シカゴのサリヴァンの事務所を辞め、やがて水平方向を強調した数々の建築をシカゴで設計するようになる。



シカゴ博の鳳凰殿。

【エドワード・マイブリッジ】

走る馬の連続写真によって映画史に名を残しているマイブリッジは、複雑な生涯を歩んだ人だった。22歳頃にアメリカに渡り、印刷出版業を営んでいたが、この頃の詳しい活動は知られていない。写真家としてスタートしたのは30代を過ぎてからで、その後ヨセミテのステレオ写真やサンフランシスコのパノラマ写真で有名になる。48歳のとき、現在のスタンフォード大学構内の馬場で馬の連続写真撮影に成功し、エイティエンヌ・マレーやヘルムホルツらと交流するようになる。シカゴ博当時は63歳、すでに本拠地をイングランドに移したあとで、白髯をたくわえた老人然とした人だった。



【マイブリッジ年譜】

- 1830 The Bittoms , Kingston-on-Thames, England に四人兄妹の次男として生まれる。
- 1852? アメリカに渡る
- 1855 サンフランシスコへ。
- 1856 サンフランシスコの新聞広告にマイブリッジの求人記事。この頃は印刷出版業だった。
- 1857 機械博覧会に本を展示。
- 1860 弟トーマスに出版業を譲り、サンフランシスコからヨーロッパに向かう途中、馬車から投げ出される。NY 滞在中にパーカー医師から、イギリス滞在中にガレル医師から写真師への転職を薦められる。
- 1867? サンフランシスコに戻る。夏から秋、ヨセミテ渓谷でステレオ写真による撮影を行う。

- 1868 2月、写真集「Yosemite Valley」を出版。4月、サンフランシスコを撮影。夏、アメリカ軍の依頼でアラスカで撮影。サンフランシスコ地震。
- 1869 写真の一部を覆って露出を調節する「スカイ・シェイド」を発明。自身を「landscape photographer」と称する。
- 1870 広告に「個人宅、馬、モニュメント、船など」を扱うとある。
- 1871 21才年下のフロラと結婚。
- 1872 サクラメントのリーランド・スタンフォード邸で撮影。スタンフォードの持ち馬オクシデントのトロットを撮影する。
- 1873 マイブリッジの撮影実験が新聞に報じられる。
- 1874 長男誕生。妻フロラとの交際相手だった Harry Larkyns をピストルで射殺する。
- 1875 フロラ病死。中米へ撮影旅行。
- 1877 サンフランシスコのパノラマ写真撮影。
- 1878 馬の連続写真撮影に成功。サイエンティフィック・アメリカン 10月号の表紙に連続写真をもとにしたイラストが掲載される。
- 1879 パロアルトのスタンフォード邸でゾープラクシノスコープ（プラクシノスコープの投射バージョン）による動画上映。
- 1880 サンフランシスコのスタンフォード邸などで上映会
- 1881 "The attitude of animals in motion" を発行。パリに渡り、エティエンヌ・マレー、ヘルムホルツらと会合。
- 1882 イギリスで連続講演。イギリスで "The Horse in Motion" が J.D. Stillman 名義で出版される。
- 1882-1883 アメリカ東部で連続講演。
- 1884 フィラデルフィア大学で撮影研究。
- 1884-1886 約 30000 枚の撮影を行う。
- 1887? Animal Locomotion 出版。
- 1889 ヨーロッパで連続講演
- 1891 The Science of Animal Locomotion 出版。
- 1893 シカゴ博覧会で講演会。"Descriptive Zoopraxography" 出版。
- 1894 イングランドに戻る。
- 1896-1897 イングランド在住中、フィラデルフィアでの撮影のため渡米。
- 1899 Animals in Motion 出版
- 1901 The Human Figure in Motion 出版
- 1904 死去。

【ポスターと石版印刷】

1893年コロンブス世界博当時のシカゴの印刷事情はどうだったのか。この年、アメリカではウィリアム・クルツをはじめとするさまざまな人々の発明によって、三原色印刷によるカラー印刷が開発されていたものの、それはまだ、ポスターや看板などの巨大な印刷に耐えるほどの技術ではなかった。ポスター広告の多くは石版印刷で刷られていた。喜劇やサーカス、魔術などの見世物の広告には、石版印刷のにぎやかな色づかいが似合った。

街のあちこちに貼られたポスターの一例として、ミンストレル・ショーのポスターを挙げることができる。ジェームズ・コリガンは、万博建設予定地に向かう途中、当時有名だったショーのひとつ、ウィリアム・H・ウェスト・ミンストレルのポスターの前を通り過ぎている。

シカゴ万博では、何種類ものガイドブックが出版されたばかりでなく、各パヴィリオンや見世物も競って自前のカタログや広告を印刷した。こうした印刷景気は、シカゴの印刷業界を活性化することになった。シカゴには、やがて「印刷通り Printing Row」と呼ばれる印刷街が形成されるようになる。

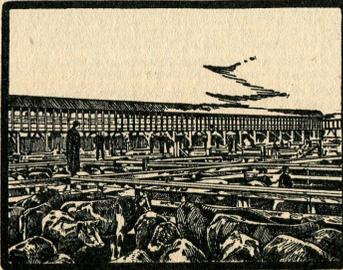
No. 21R244 THE CHICAGO STOCK YARDS, OR FROM HOOF TO MARKET.



Killing Cattle.

WHILE THERE MAY BE subjects more interesting to one or the other than this particular one, there is no subject of such general interest throughout the country as the method of conducting the wonderful packing houses at the Chicago Stock Yards. The largest and best of these was selected by us for this purpose, and a complete and valuable set of 55 slides, showing the entire workings and method of a modern packing house from the time of the shipping of the animals, their reception at the stock yards, the slaughtering, curing, saving and inspecting, the manner in which the by-products are utilized, and numerous other matters of interest in connection with the work, which are not within the space at present at our disposal.

No. 21R244 Price of stereopticon lecture complete, with 55 slides, of which 12 are colored, special..... **\$53.00**
 Price of 55 slides, including view box and lecture, 12 slides colored, 43 uncolored..... **\$16.00**



The Pens.

【印刷・見世物・アニメーション】

当時、シカゴの宣伝広告印刷を手がけていた会社のひとつに、ナショナル・プリンティング&エングレイヴィングがある。シカゴ万博の始まる4年前の1889年、この会社に一人の男が入社する。

若い頃から見世物小屋に出入りするのが好きだったこの男は、この会社でサーカスなどの広告製作を担当しながら、大量印刷の技術や見世物向けの派手な画風と色づかいを吸収する。

二年後の1891年、男はシカゴからシンシナチに移り、10セント博物館の美術担当になり、けばけばしい宣伝ポスターを次々と描くいっぽうで、地元の新聞に一コマ漫画を掲載するようになる。

観客のパースペクティブを狂わせ、めくるめく空間移動を伴う見世物小屋の世界に親しんできた男は、対象をさまざまな視点から描くことを得意としていた。デッサンの対象となる動物にも事欠かなかった。そして何よりも、彼は驚異的なスピードで描くことができた。折しも、パリではアール・ヌーヴォー調のポスターが流行し始め、それは数年遅れて1896年以降、アメリカでも知られるようになった。男はサーカス広告で会得した派手な色づかいに加えて、アール・ヌーヴォー調の曲線や色彩も使いこなすようになった。

この男、ウィンザー・マッケイは、やがて「リトル・ニモ」を新聞連載し、驚異的な色彩とパースペクティブによって、カートゥーンとアニメーションの歴史を塗り替えることになる。



【「ホワイトシティの悪魔」】

2001年の「ジミー・コリガン」に続いて、2003年、同じくシカゴ万博をあつかった「ホワイトシティの悪魔 Devil in the White City」(エリック・ラーソン Erik Larson) がアメリカでベストセラーとなった。

ラーソンは、シカゴ博にともなって急ピッチで進むシカゴの近代化を描くべく、二人の主演を配した。一人はダニエル・バーナム。シカゴの代表的建築を次々に手がけ、のちにサンフランシスコの都市計画を行なう、いわばアメリカを代表する建築家であり都市計画者だった。

そしてもう一人はドクター・ホームズ。彼の端正な容姿とやわらかい物腰は、大都市の魅力に惹きつけられてやってきたあまたの女性をとらえる。そして彼は、彼女たちにひそかで、禍々しい欲望を向けていくようになる。やがて彼は、万博の開催予定地であるジャクソンパークの近くの土地を手に入れると、自分の欲望をより確かに実現するべく、奇妙な間取りの建築に着手する。1893年、そこは万博に訪れた女性たちを宿泊させるためのホテルとなった。その名も「ワールドフェア（万博）ホテル」・・・。

バーナムとホームズ、複眼の視点を得て、この小説は立体的で読み応えのあるものになっている。万博を設計し、シカゴの都市計画したいを見直していくバーナムによって、読者はいわば鳥瞰の視点で都市を見渡す。いっぽう、街角の小さなホテルを経営しながら、自らの欲望を推し進めていくホームズによって、読者はシカゴのとある街路から、ホテルの回廊、暗い小部屋、ペチカ、煙突の隘路にまで導かれる。鳥の眼と虫の眼を往復することで、読者は高性能ズームを備えた望遠鏡を覗くように、都市を巨視し、微視することになる。

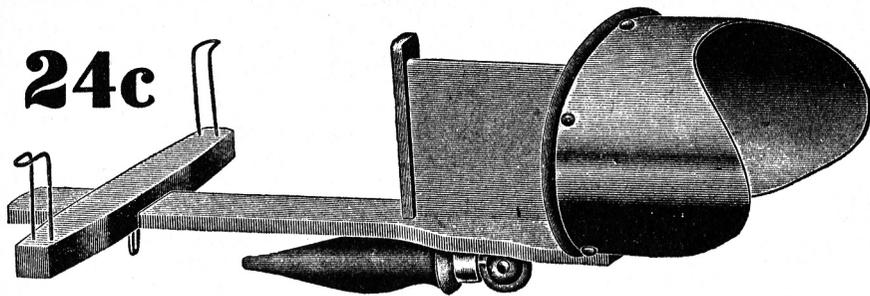
この本には、バーナムとホームズだけではなく、アメリカ風土史、精神史にとって重要な人物たちがきら星のように登場する。たとえば、シカゴ博の途方もない規模に圧倒されたある労働者は、我が子にその有様を克明に聞かせ、その子供はやがてアニメーションの道に進み、ウォルト・ディズニーと呼ばれることになる。そのほかにも、ニューヨークのセントラル・パークを設計したオルムステッド、シカゴ市長

に熱狂し奇妙な葉書を投函し続ける謎の男、プレンダーガスト、西部劇アトラクションの立役者にして、のちにジョン・レノンに皮肉られることになるバッファロー・ビル、現代の観覧車の創始者フェリスなど、いたるところ、読みどころに満ちている。

ラーソンは、こうした人物たちをぜいたくに配置しながら、アメリカ史をまるで気象学のように大きなうねりとして描いていく。シカゴ博の時代背景を知るには必読の書といってよい。

ただし、その手つきは「ジミー・コリガン」とまったく対照的だ。

「ジミー・コリガン」は、シカゴ博のパレードで描かれる星条旗の文字の、たった一人の人物に焦点を当てる。そこには華々しい都市計画も禍々しい犯罪もない。微細な誰にでもある、しかしたった一人にしか起こりえない感情が、100年以上も前の広大な万博会場の中で揺れている。



あとがき

この文章はもともと 2002 年に雑誌「map」4 号に掲載するつもりで用意したものであった。その後、2005 年に少し手を入れたもののご覧の通り断片的で、map のほ
うもしばらく活動がお休みとなり（といいつつ、小田さん、福田さんはいつもおもしろいことをやってるので要チェックですよ）、原稿は久しくデータとして埋もれていた。

せっかく紙ものの話なのだから紙で…だとしたらどんな紙を使ってどうしよう…
なんてことも幾度か考えたのだが、考えるたびに時が過ぎ、2010 年、ついにジミー・
コリガンの日本語版が完結した。これでようやく、この迷路のような作品を通読し
ようという人も増えるだろう。もう、断片は断片のまま出してしまったほうがよい。
というわけで、えいやっとページ割りをしてみたのがこの PDF ドキュメント。図版は、
手許にある古本や絵はがき、幻燈機などから採った。

この原稿を書くきっかけを与えてくれた、すてきなヴェジ食堂、「なぎ食堂」店主
にして compare-note レーベルオーナーの小田晶房さんに感謝します。あ、これ、
プリントアウトして食堂に一冊置いてもらおうかな。それで「紙版」もできること
になるよね。そうしよう。

5. August 2010

細馬宏通

【参考文献】

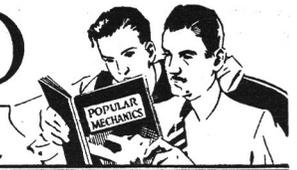
- BART 1922 Chalk talk and crayon presentaion
- J. K. Brown 1994 Contesting images The university of Arizona press.
- D. Chapman 1994 Sandow the Magnificent: Eugen Sandow and the Beginnings of Bodybuilding. University of Illinois Press.
- G. Hendricks 1975 Eadweard Muybridge, the father of the motion picture. Dover Publications.
- E. Larson 2003 The devil in the White City Vintage Books. (邦訳：『悪魔と博覧会』野中邦子訳／文藝春秋社)
- J. P. McBrien 2004 Pocket guide to Chicago Architecture, 2nd edition. W. W. Norton & Company.
- R. Miller 1990 The great Chicago Fire. University of Illinois Press.
- C. Ware 2001 Jimmy Corrigan, The smartest kid on earth. Jonathan Cape Ltd.(邦訳：『ジミー・コリガン日本語版 vol.1-3』, 峯岸康隆 (編), 伯井真紀、中沢俊介、山下奏平 (訳) PRESSPOP GALLERY)

【図版】

- Photographic Gems of Art 1896 Mast, Crowell & Kirkpatrick.
1902 edition of The Sears, Roebuck catalogue. A Bounty Book.

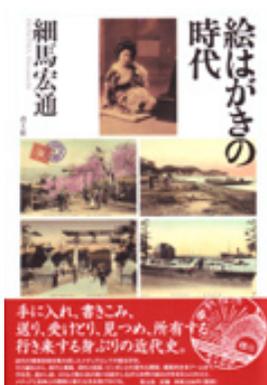


CLASSIFIED *Advertisements*



細馬宏通『浅草十二階』（青土社）
2001年

明治23年、浅草に忽然と姿を現した十二階の塔。花袋は眺め、啄木は書き、乱歩は覗く。塔の落成から倒壊までを活写する十二章。



細馬宏通『絵はがきの時代』（青土社）
2006年

シカゴ博とアメリカ初の絵はがきとの関係を記した「シカゴみやげ」を含む、絵はがきについての16章。

2010年8月6日 第1.2版

